

2020 2/11

No.2108

毎月第2・第4火曜日発行

政経 かながわ

一般社団法人
— 神奈川政経懇話会 —



高校野球の第92回選抜大会（3月19日から13日間・甲子園）の出場32校を決める選考委員会が1月24日、大阪市の毎日新聞大阪本社で開かれ、神奈川から東海大相模（2年ぶり11度目）が選出された。



contents

視点点描	3
ラグビーW杯のレガシー	

政治	4
「2020年政治展望」	
レガシーづくりに年内解散も	

環境	8
日本で根付くか、SDGs	
取り組み応援するメディア	

くらし2020	10
手の震えを超音波で治療	

企業最前線	12
広がる企業の有害鳥獣事業	
通知、捕獲やドローン追跡も	

アジアの風	14
大脱走のパトスはあるか	

NNAアジア経済リポート	15
--------------	----

事務局だより

◇2020年2月特別講演会

2月20日(木)

富士ゼロックス神奈川と共催
「第11回神奈川TOPセミナー」

会場：ホテルニューグランド
受付開始午後3時

▽基調講演

午後3時30分～4時40分

本館2階「レインボーボール
ルーム」

講師は関電工特別顧問の山口
学氏

演題は「仕事への誇り・使命感
～福島第一原子力発電所事
故復旧作業の現実～」

▽特別講演

午後4時50分～5時50分

本館2階「レインボーボール
ルーム」

講師はNHKサッカー解説者
の山本昌邦氏

演題は「勝つためのリーダー
シップとチームワーク」

▽神奈川情報交流会(懇親会)
午後6時～7時30分

タワー棟3階「ペリー来航の間」

◇2020年3月定例講演会

3月27日(金)午後1時30分～3
時

崎陽軒本店4階「ダイナス
ティー」

講師はヨロズ代表取締役会長の
志藤昭彦氏

演題は「ヨロズのグローバル
経営」

視点 点描



ラグビーW杯のレガシー

1月に開幕したラグビーのトップリーグが盛況だ。昨秋のワールドカップ（W杯）で史上初めて8強入りした日本代表の勇姿をひと目見ようと、会場には2万人を超える大勢の観客が押し寄せている。「にわかファン」であろうと、マイナーだった競技の人気を大きく後押ししているのは間違いない。なぜこれほどW杯が盛り上がり、

その後も熱を帯びているのか。一つは、優勝候補のアイルランドや強豪のスコットランドを破って決勝トーナメントに進むなど、日本代表が強かったからだ。勝てば盛り上がり、負ければ冷めるのはスポーツの常。見る側だけではない。報道する側も、視聴率が取れる、部数が伸びるとなれば時間や紙面を大きく割く。

人気の要因として、①競技そのものの面白さと特性②日本代表の多様性―の2点にも目を向けた。肉体と肉体がぶつかり合う激しさ、華麗なステップやパス回し、さまざまな体格の選手が駆け回る姿は、初めてラグビーを見た方にも新鮮だったに違いない。タックルで倒されてもすぐに立ち上がり、大差を付けられてもあきらめずに立ち向かっていく姿に心を打たれた人も多いことだろう。

激しいプレーはけがとも隣り合わせのため、相手をリスクトして戦うことが求められ、レフェリーは危険なプレーに目を光らせる。試合が終われば「お前ら強いな」「いいタックルだったよ」とたたえ合う様は、微笑ましくもある。日本代表は外国出身の選手が半数を占めた。規律が保たれたプレーへの称賛から、外国出身者に頼り過ぎだといった揶揄まで、さ

まざまな声が聞かれた。

ニュージーランド出身のリーチ主将、ジョセフヘッドコーチの苦労は図り知れない。「ワンチーム」をスローガンに掲げてチームをまとめ上げるため、互いを知ること、時間を費やし、強みを掛け合わせていく。そのためにのおのの良さを理解し、違いを認め合い、大きなエネルギーに昇華させていくことに腐心したことだろう。

日本代表の功績は、同調や同質性を求めたがる日本の社会や企業、組織に、大きな風穴を開けたと言っているのではないか。

ラグビーW杯のレガシー（遺産）とは何かと問われ、多様性を受け入れて違いを認め合うことが浸透したこと―。何年後かに、そう胸を張って言える社会になっていることを期待している。

（神奈川新聞社運動部長

兼映像編集部長 佐藤 英仁）